

回想のルパン

寛郎を待った三十年

小野田

のルバング
待った三十年



小野田凡二

浪曼

回想のルパンⅢ ― 寛郎を待った三十年 ―

《検印廃止》

昭和49年 6 月10日 初版発行

¥ 780

著 者 小野田 凡二（種次郎）
発 行 者 西 川 議 浩
印 刷 株式会社上野印刷所
製 本 中村製本株式会社

発行所 東京都港区 〒108 株式会社 浪 曼
白金台3-14-4
電話(03)445-8641(代) 振替 東京178054

落丁・乱丁本はお取りかえいたします。

© 1974 Printed in Japan

0023-740034-9226

寛郎を待った三十年

まえがきにかえて

私以上に臍の曲った男があつて、ある祝いの床に掛った高砂の軸の尉と姥に「何が目出たいんだ、いい年をして、まだ松葉搔きをする業人ごうじんが」と吐き出すように言つた。

今年私は八十八歳、妻も満八十八歳、赤飯ぐらいは祝わねばと風呂敷を染めた。

松ならぬ 桜の下の 尉と姥

これは「穀つぶし桜の下で暮しけり」の一茶に倣つたもの。

花屑も掃かで月日を重ね来し

前の臍曲りの男への反抗である。そして休日週間の五月四日、その小宴を張る予約を料亭にしてフト氣付いて「ルバングに事が起つたら取り消させて貰う」と条件をつけたら、主人はルバングの事でしたらと快く聞き入れた。

昨年四月、私はルバング島に渡り、搜索の幕を下して貰った。「私等の冥加の至り、これ以上は罰が当たります」と。事実、私等は日比両国の努力と世間の同情に感謝しきれぬ思いであった。

出て来るものか、そんなお伽噺のような甘い事を望んではいかんと心に叱って来たが、そのお伽噺は事実となって現れ、寛郎の衰えも見せず胸を張った写真がテレビに映ったとき、これで本望だ、生きていた甲斐があると思った。それがフィリピン国で解除した武装を再びつけて、歓呼の中に羽田に着き、そして故郷父祖の地に「凱旋」した。何という仕合せなことであろう。私は世界一の果報者だと思った。

そこへ米寿を祝う日が来た。取り消しどころか全く思いもよらぬこの凱旋者を加えて子供四人が並んで、私を祝福してくれた。親族旧知心から私の長寿と幸福を讃えてくれた。

帰ったら浪漫社からこの本の校正が来ていた。三月十二日、羽田に出迎えるため上京の列車の中の私を、浪漫の方が訪ねられた。常でさえ富士川のあたりからざわめく胸を、まして羽田に三十年ぶりの我が子を見ようとする慌しい心である。私の文章については和歌山の『けいてき』吟社の友人達に聞いて下さいと答えた。その結果が、この本の校正刷である。編集がまとまったところで、相当量を新たに書いた。来月二日の米寿祝賀の俳句会までに出版してくれるという。一体幸福はいつまで私の上に重ねられるのか。家を出て六

十五年、市井の庶民として辛うじて生存した。偏に天地神明と広く衆生の恩恵による。前世どんな功德を積んだか、空恐ろしきことである。

過般、我が国からフィリピン国の厚意を謝するために鈴木善幸特使が行った。謝礼として贈った三億円を辞退したマルコス大統領は、

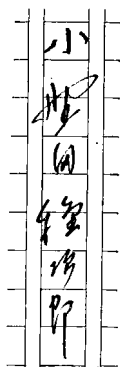
金銭を以て律すべき問題でない。小野田が見せた忠誠心と勇氣。だからこそわれわれは彼を名誉あるフィリピン兵士と同様に待遇した。日本国民が彼を温かく迎え家族に仕合せが訪れたことを知って、われわれの努力も十分に報われたわけだ。

と述べられたという。何という尊い^{とうと}お心、美しいお言葉であろうか。家族に仕合せが訪れたと知って努力が報いられる、言いかえれば私等家族の幸福のための三十年の努力となる。私はこの三十年に尽された努力に對して飽くまでも幸福なる生活をつづけなければならぬ。それが又、国内国外の御同情御支援に報ゆる道でもあろう。

野人の身上、華麗なる一篇の書冊となる喜びも又この意に外ならぬ。私は浪漫と友人諸氏の厚意による重ね来る幸福に、雲上を歩むの思いに没りつつある。

昭和四十九年五月四日

米寿祝賀の日



回想のルバンゲ・もくじ

寛郎を待った三十年（まえがきにかえて）……………1

臍曲り一代……………9

回想のルバンゲ……………83

臍曲り一代 補遺

看山窓日誌

『けいてき』この十年

109

ルバングの息子

161

回想の日々

177

写真 共同通信社
装丁 田崎 正三

小野田 凡二（種次郎）

回想のルバング

——寛郎を待った三十年——

臍
曲
り
一
代

浦賀灣頭の砲声

「お前、先生にならんか」

明治三十五年、十五歳になった正月である。村の助役をしていた父が、役場の歸りに准教員養成所の案内書を持って来て、夕食の時にこう話しかけられた。百姓の子に生れたものは百姓で終るといふ運命だけしか知らぬ私に、突如として社会というものが目の前に開けた。

名は准教員養成所だが、郡長さんは海草郡に教員が足らぬので師範学校への今でいう予備校として計画されたもので、その勧誘が役場に來たので父は私をそこに入れようと思つたのである。人の一生は右するところを左にし、縦にふる首を横に振ることで運命が大いに転換される。父が役場吏員でなかつたら私は百姓で老いたかも知れぬ。

私は臍曲りだ。倅や娘の月旦するところによれば私の臍曲りはいろいろの角度だといふ。天の邪鬼のように何もかも百九十度に反對するのではないお父さんを尊敬するという。そう言えば私の臍は時には三十度位でかなり同調するようなこともあるが、時に百八十度を越え二百七十度の反對の横向きもする。回り来る運命に對して私の臍は常なく曲つて私

の運命は作られる。

この年の前年に第三中学校が粉河に出来たという時代、百姓の倅など学問には縁が遠かった。小学校は何の為に行くのかが判らない。不就学だと学務委員や巡査が喧しく言ってくるから学校へ行かせるのである。学校には宿題などあろう筈もなし、予習や復習は全然ない。風呂敷包みの学用品と弁当殻を家の入口から上がり框に抛り込んで、暮れる迄遊び回ったものである。お正月の風上げから冬の枯草焼きまで、山には木の実、川には雑魚、真夏は終日池や川遊びで田舎には餓鬼共の天地は広がった。

私は数え年六歳で小学校に上がり義務教育尋常科四年と高等科四年を十四歳で卒業したが、ただ漫然と学校へ通ったので八年間記憶に残るものはない。僅かに入学当時の暫くと卒業前の一、二年を幽かに覚えていて。一年生の読本はハナ、トリ、ハタ、ヤリで始まって四、五頁のあたりにイヌネコヲオフ、ネコカキヲコエントスがあって、この越えんとすが否定の言葉でないことが妙に思った。或る日、隣村の先生が見えて腰から煙管を出してこれで作文を作れといわれた。キセルハタケトカネトニテツクリタバコヲノムモノナリと書いたら、えらいと褒めてくれた。

それから六、七年、全く空白で、往復四キロの通学を毎日無為に過した。道を削り込む百姓の大根を足蹴にして折ってしまったり、叱られた腹いせに藁塚の藁を小川の底へ運ん

て暖をとったり、今のよう勉強で縛られるのではないから餓鬼共の力のハケ口がつい良からぬことになったようである。

高等三、四年ともなると学科にも身が入って来た。読本には『日本外史』や『十八史略』が引用され「忠ナラント欲スレバ孝ナラズ孝ナラント欲スレバ忠ナラズ重盛ノ進退コニ谷マル」など暗ら覚えして戦争ごっこにも「兇賊いづくにありや」など大見得を切ったり「進退タニマツタ」など巫山戯る。項羽が四面楚歌のところで、「沛公関にあって財を貪り色を好む」だの「虞や虞や汝をいかんせん」だのを先生どんな註釈をすかと先刻御承知の生徒の方が先生のどちらかたを興味を以て迎えていた。

だが、子供のこと『太平記』の落花の雪の道行文は珍ブン漢ブン判らなかつた。「行き交ふ人に近江路や」だの「時雨もいたく守山の」「末はいづくと遠江」などの掛け言葉というものは一向に合点が行かなかつた。子供の心理ということが当時はあまり判っていなかつたのだらうか。

数え年十四歳（明治三十三年）で卒業した。学校を出たらもう餓鬼遊びはさせてくれぬ。

蛙の子は自然に蛙になるように、百姓の子は百姓を覚えねばならぬ。祖父と下男とでやっている百姓の一員となって何かと百姓の真似をした。「おやじがかりか春の日か」という諺のように至極のんびりとしていた。どれだけという目的もなければ欲望もない。だが春

の日永も秋の短日もそれぞれに苦しさがあった。山の上の畑で春の日の暮れるのを待つ。何べんも西の太陽を見る。太陽は真下の海に落ちないで横にりに北へ移ってゆく。身は疲れるし腹が空くし、今俳句で考える、暮れ遅しや暮れなすむの感ではなかった。短日の秋は、朝から日が短かいと口ぐせにせき立てられて、夜を日につぐという言葉通り、月が玲瓏と照っているのに尚棕櫚の幹に薬塚を積み上げるなど、高きに従って力が入るし、夜風が冷たく艶やかに棕櫚の葉を鳴らす。

レジャーというものはない。月々にある休みの日、お節句だとか、八朔だとか、正月は田仕事がなくてゆっくりした。会式だの神社の競馬などは遠きを物とせず行つた。岩出の鉄橋工事を皆が見に行くからとて弁当持ちで行つて、南の山に登って弧形の高いところに散る火花を珍しく見た。開通（三十三年）したら早速乗りに行つた。汽車に乗ることが一番のレジャーであつた。南海鉄道が北口（紀ノ川北岸）まで開通したのがまだ小学校にいるときだった。大阪まで乗せて貰うことが天にも登る心地で、北口ステーション（当時は駅とはいわない）を出ると首を窓から出してトンネルの口が見たかった。「藪を通りすぎれば」と教えられたが、蒸気機関車が上り勾配をあえぎあえぎ行くのがもどかしかった。今でもあの藪を見て当時のあどけなさを思う。

五泊六日の大峰山参りは「せんち長旅、かまの口は都」のことわざ通り、大変な旅行で